



# NPOSSE

東日本大震災  
緊急支援活動報告書

SSEの皆様へ  
大変お世話になりました。  
毎日、温かい手作りの  
食事を用意して下さり。  
本当に感謝しています。  
ありがとうございました!!  
石巻商業高校生徒・父兄会

**NPOSSE** SHIKOKU  
SPORTS  
ENVIRONMENT  
RELATION  
特定非営利活動法人 四国スポーツ環境リレーション

〒791-0301 愛媛県東温市南方1992-4  
TEL 089-960-6905 FAX 089-960-6906 URL [www.sser.jp](http://www.sser.jp) e-mail [info@sser.jp](mailto:info@sser.jp)

2011年10月30日

# NPOSSER

SHIKOKU  
SPORTS  
ENVIRONMENT  
RELATION

## 石巻からの、報告。



活動報告のごあいさつ

「自然災害の多いわが国において、  
常にそなえ、常にわたしどもの出来る最善の活動ために。」

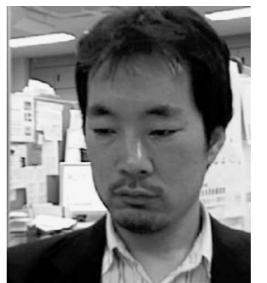


NPO SSER理事長  
**山田 徹**(56)

2011年3月11日午後4時ころ。わたしたちは通常のSSERの活動のため、琵琶湖を訪れておりました。車中でそのニュースを聞き、次々と流れる不確かなものの戦慄を覚えるような光景に言葉を失いました。そのあとの予定を全てキャンセルして、直ちに本拠のある四国に取って返しました。NPO SSERのメンバーに招集をかけるまでもなく、皆がわたしたちの能力で出来ることをしようと集まってきておりました。わたしたちは日ごろは国内外のラリーなどスポーツイベントを主催する団体です。その組織から一部をNPO化し、自然環境の保護と利活用またスポーツや教育プログラムの運営などあわせ、災害時の支援活動などを標榜しております。本年

で15回大会を迎えたモンゴルのラリーを例に挙げますと、ゴビ砂漠の水も電気もないところでレストラン・メディカルテントを設営し、数百人にのぼる競技参加者・スタッフに温かい食事や医療の提供を行っています。したがって本部には大量の機材が常に備えられており、それらを運ぶための大型の4輪駆動のトラックや人員を運搬するマイクロバスやそのほか4輪駆動車が常備されており、かつそうした技術に優れた者が大勢集って居るのです。この機材と力を提供するべきである。という結論に時間は必要ありませんでした。出発の準備よりも緊急車両登録に時間を要し出動が予定よりも大幅に遅れることとなってしまいましたが、そのぶん

全国から大勢の仲間が交代で参加するという自律的で継続的な支援体制が構築されていきました。また菅原義正様と中島祥和様の呼びかけで大勢の方々からは、温かい励ましと寄付を頂戴いたしました。その思いを全て被災地の活動に活かせたという思いもありますが、私どもの成せたことなど誠に微塵たるとの思いで心が痛みます。ここに報告書をまとめつづご支援を賜りました皆様に、あらためまして深く感謝の意を表します。末尾ながら、わたしたちはこうした自然災害の多いわが国において、常にそなえ、常にわたしどもの出来る最大の活動のために日々を精進してまいりことをお約束として支援に関する御礼のございさつといたします。



NPO SSER事務局長  
**白川 淳**(36)愛媛県  
「この思いを忘れず、今後の活動に活かす方法をしっかりと考えたい。」  
石巻市内の全避難所が閉鎖されたというニュースを聞きながらこの原稿を書いています。私が被災地を訪れた6月下旬は仮設住宅への入居が始まつた頃であり、支援活動の転換期と言われていました。地域コミュニティの構築、被災者の自立ということがあちこちで議論されていました。現地でのピアリング調査ではNPO SSERの緊急支援活動の確かな成果を感じるとともに、今すぐには何も出来ないもどかしさを感じました。この思いを忘れず、今後の活動に活かす方法をしっかりと考えたいと思います。



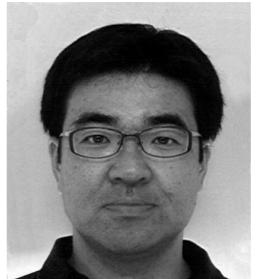
NPO SSER理事  
**山崎 洋靖**(48)愛媛県  
「自尊自立」

石巻・女川での支援活動の第2陣として22日に松山を出発し、福山市で仲間2名と合流、石巻商業高校の避難所へ到着したのは翌朝でした。瓦礫で埋め尽くされた被災現場を目の当たりにし言葉もせず、ただただ津波の脅威に胸を締め付けられました。頻繁に起る震度5クラスの余震に怯えながら、炊き出しや他の避難所の調査を行いましたが、女川原発の避難所では、「ここはまだ暖房があるからまし」と3歳の子のお母さんが言うほど、どこの避難所でも皆さん寒さに震えているのが現状で、一刻も早い支援物資の供給が必要でした。現地入りして3日経った朝、避難所にいる女川第四小学校の卒業式に出席させていただき、卒業生は身内を失いながらもこれから一生懸命生きていくぞという強い意志を自らの答辞で述べていました。避難所の玄関に掲げられている「自尊自立」という言葉が強く心に残る支援活動でした。



NPO SSER理事  
**麻生 賢司**(49)広島県

「この経験は何処かで役に立てたい。」  
SSERから「石巻に行きます。」との連絡を受けたのは震災発生から5日程経過したときでした。しかし、阪神大震災の時もそうだったが、一般の人は現地に入れないのではと一瞬思いましたがSSE Rはすでに災害派遣の許可を取得できて石巻商業高校に到着できることになったのです。現地に着いて、石巻市内、女川町の災害現場をこの目で見て一瞬疑いましたが、現実でした。住むところがない、食べるものが無い、今の日本ではありえないことなのですが実際に目の前でそれが起きていました。石商では毎日食事の準備をしていました。みんなで力を合わせましたが、10日間の滞在でそれしかできませんでした。何かほかにとかも想うのですがいざというときにはできないものです。この経験は何処かで役に立てたいのですが、そうでない事を祈るばかりでした。



NPO SSER理事  
**厚主 和雅**(41)愛媛県

「この先、何度でも訪れます。」  
到着当初は騒然とした状況で、何をどうすればいいのか誰も解らない状態でした。そんな中、我々の野外での経験やケータリング設備が生かせるのではないかと感じます。4月11日に引き上げる際、思いもよらない程、皆さんに感謝され、何故だか涙が止まりませんでした。被災地の状況にあるこの地から離れる申し訳ない気持ちからだったのかもしれません。「本当に役に立ったんだろうか?」と思い悩んでいると現地の方から「出来る人が出来ることをすればいい」と声をかけて頂き、また逆に助けて頂きました。元気を与えるつもりが、逆に元気をもらう毎日でした。この先、何度でも訪れます。ありがとうございました。



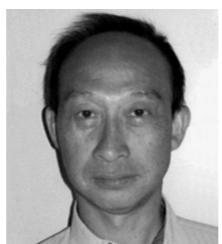
青木 栄里香 (37) 栃木県 会社員  
「勇気と感動を頂きました。」

主に炊き出しと物資の調達を行いました。当初は物資も少なく、十分な支援が出来なかつたことが今でも後悔でなりません。しかし時間の経過と共に次々と支援物資を送つて下さった支援者の方々に感謝申し上げます。また、自分も被災しているのに差し入れして頂いた方、炊き出しを進んで手伝ってくれた石巻商業高校に避難された方々、段々と元気になっていく東北の方々の姿に本当に勇気と感動を頂きました。最後にこのような貴重な体験をさせていただきましたSSERにも感謝申し上げます。一日も早く東北の方々に平穏な日常が戻るよう、これからも支援して行きたいと思います。



榛葉 靖久 (43) 長野県 団体職員  
「“何ができるのか?”ということよりも“何かしよう!手伝おう”と」

3・11のあの日以降様々な映像を目の辺りにするにつけ、自分でも何か手伝えることは無いか?という思いが高まっていた矢先、SSERが災害支援活に向かうということで、縁もあり参加させてもらいました。不器用な自分に何ができるのか?という不安と共に始まった1週間でしたが、「何ができるのか?」ということよりも「何かしよう!手伝おう」ということが大事なのだと思います。



明神 佐知 (41) 高知県 公務員  
「人間の生きる強さを感じました。」

3月末から約一週間、高知より参加しました。被災地を実際に自分の目で見ると、余りにも凄まじく仮想空間にいるようでした。炊き出し等の支援に参加させていただいた中で、被災者の方々から「まだ足りていない他の方にまわしてあげて。」や「ありがとうございます。」と言って頂き自分達が大変でしんどい状況でも他の人を思う気持ちに励まされ、また辛いけれど皆笑顔で頑張っている姿に人間の生きる強さを感じました。自衛隊の支援物資基地には日本各地や世界各地からの物が集まり、ボランティアの方も各地から沢山集まっており、皆がこの災害からの復興を願っている事を感じました。被災地の一日も早い復興を祈っております。

三ヶ尻 俊雄 (52) 大分県 公務員  
「支援する多くの課題が見えてきました。」

飛び込みで入った被災地は度々雪の舞う中での活動でした。どの程度被災者の支援になったかは分かりませんが、社協等と連携して能力を生かして上手く活動できたとは思う反面、支援する多くの課題が見えてきました。今後の課題は大きいと思います。今は、一日も早い被災地の復興を願いながら、支援に参加された方々に敬意を払うとともに、お世話になったことへお礼申し上げます。



山口 昌幸 (57) 北海道 公務員  
「渡波地区・女川町、息を呑む惨状に言葉がでない…。」

4月5日石巻に入った。ほこりと泥をかぶった山積みな家財道具。そして案内してもらった漁港・渡波（わたのは）地区・女川町、息を呑む惨状に言葉がでない…。「何かする、何かしなければ」という思いは空回りばかりする、しかし復興に努力する人たちとの確に指示を出すリーダーに勇

気をもらい、11日追悼のサインを聞きながら復興を祈った。



正井 広昭 (52) 長野県 団体職員  
「肉を大量に仕入れてすぐに来い。」

その時、信州南部では、軽い眩暈を感じるようなゆっくりとした揺れが長時間続きました。そして、色々なメディアを通じて、その惨状を知るにつれ、私にも何かできることはないとと思っていた矢先にSSERの活動を知り、早速連絡を取つてみると、既に現地入りしていたカオルさんから、肉を大量に仕入れてすぐに来いとのこと、とても有意義な1週間でした。



白砂 久司 (40) 兵庫県 柔道整復師

「身体のケアより  
心のケアの方が大切だ。」

女川総合体育館で3日間マッサージ活動をしました。避難所生活も3ヶ月ということで身体のコリはもちろんでしたが、心の傷に悩んでる方が多かったのに驚きました。身体のケアより心のケアの方が大切だと感じました。今回の活動を通じていろいろと考え、学ばせて頂きました。



枚田 正治 (46)  
兵庫県 会社員

「今回の活動の経験は何より自分の貴重な財産になった。」

初めての災害ボランティアという事もあり、始め聞いたときは正直どのような心構えで参加すべきか良く分からぬ気持ちでした。震災から日が経つにつれて、私も阪神大震災で被災した経験を持っているので震災地の事を思うと居ても立っても居られない心境だった為、とにかく直接自分の目で現実を見て考えて自分が現地で出来る事をやるしかないと思い、災害ボランティア活動に名乗りを上げた次第です。現地入りしてみると朝晩の気温は氷点下に冷え込み、普段から野外で活動していない者にとってはモチベーションを保ち続けられないほどの環境だと感じました。幸い現地メンバーは皆野外活動のプロのような人ばかりで、復興に向けて一致団結する仲間達は最後まで何よりも心の支えになってくれました。炊き出しに実際に行った方々から「本当にありがとう」と感謝の言葉を頂けて大きな力になったのも事実です。でも私の口からは最後まで「頑張って下さい」とは言えませんでした。頑張るには、あまりにも被害が甚大だったからです…。口には出しませんでしたが「生き続けて下さい」と心の中で言い続けたのが実際の気持ちでした。あと現地において石巻の災害ボランティアセンターに全国から集まつたスタッフとボランティア参加者との間に言葉では表しにくい一体感のようなものがあり、過酷な生活環境にも負けずに全力で復興に向けて作業を行つている姿を目にしても「まだまだ、日本も捨てたもんじゃない!」と強く感動しました。今回の活動の経験は何より自分の貴重な財産になったと思います。最後に、このチャンスを下さったSSERと仲間達に一言「ありがとうございます」と送ります。

# 「何ができるのか?」ということ よりも「何かしよう!手伝おう」と。 榛葉 靖久



身体のケアより心のケアの方が大切だ。  
白砂久司





**五百蔵 宏明** (39) 兵庫県 自営業  
 「“ありがとう”と言ってもらえた事を忘れる事はありません。」  
 東日本大震災での現地の状況は報道で耳にしたものとは違いました。温かい食事を楽しみにしていた人達の顔と「ありがとう」と言ってもらえた事を忘れる事はありません。NPO SSERの災害支援スタッフとして現場に行く事が出来たのは良い経験でした。



**佐藤 薫** (61) 大分県 自営業・農業  
 「あの時あれでよかったのか、もっともっと何か出来たんじゃないか。」  
 夢の中ありますように、と神様に何度も何度も頼んだ。だけどこれは事実だった。今この文章を書きながら、あの時の涙が流れ出す。思い出したく無い事の一つだが忘れる事は出来ない。あの時あれでよかったのか、もっともっと何か出来たんじゃないか、少しうそ思っています。



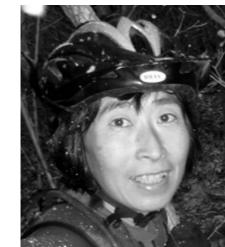
**若林 葉子** (40) 東京都 雑誌編集者  
 「今でもあるごとにお会いした方々のことを思い出します。」  
 ボランティアという意識はなく、無理せず（いえ少しだけ無理をして）、自分のできることをできる範囲でさせていただく。そんなスタンスでお手伝いさせていただきました。あの時、石巻や女川でお会いした人たちはどうされているだろうかと、今でもことあるごとに、お会いした方々のことを思い出します。



**高橋 貢** (36) 神奈川県 会社員  
 「活動中、最大の余震に襲われたときは死を覚悟しました。」

いまでも石巻、女川の皆様のことを考えない日はありません。毎日地震発生時刻には腕時計のアラームを鳴らし、支援活動でお会いした皆様の事を考えています。印象的だったのは、悲惨な光景と意外にも明るい（振る舞いだけだろうか）石巻、女川の皆様。暖かい食事がこれほどまでにありが

たく感謝されるとは。活動中、最大の余震に襲われたときは死を覚悟しました。高いところへ向けて連なる自動車のテールランプの列がなすあの形を今でも頭の中に描くことができます。たくさんのボランティアが集合し、効果的な活動を繰り広げる反面、その中にも様々な問題が発生していました。ボランティアの在り方については近年議論に上る事が多いが、そこで語られる問題の多くが石巻においても発生していました。多くを失いながらも生き延びた友人が仙台、宮古にいます。切なくてどうだった？と聞くことさえもできません。ここまで述べたことを感想とよべるでしょうか？これらの事を忘れられる日が来て欲しい、でも忘れない事の一つだが忘れる事は出来ない。あの時あれでよかったのか、もっともっと何か出来たんじゃないか、少しうそ思っています。



**関 麻実子** (47) 山梨県  
 「なぜか覚えているのは笑顔ばかり。」  
 湯気の立つ炊飯ジャーを見て「最初からあったかいご飯だよー!!」と目を輝かせた子供。メニューがカレーと聞いて思わず歓声を上げた若い先生。風呂敷包みを担いで瓦礫の道を延々と歩きながら、「健康になりますよ」と笑った年配のご婦人。なぜか覚えているのは笑顔ばかり。あっという間の10日間でした。



**川合 歩** (47) 大阪 会社役員  
 「今後の災害対策にフィードバックしたい。」  
 短い期間でしたが、石巻・女川・南相馬地域での活動に参加させて頂きました。未曾有の事態をリアルタイムに体験し、被災者の皆さんと（ほんの一部ではありますが）共感させて頂けたことに感謝しています。阪神大震災に続いて今回の体験はその違いに気づくことも多く、今後の災害対策にフィードバックしたいと思います。



**菅原 照仁** (39) 東京都 会社役員  
 「前を向いて立ち上がる強さを感じました。」  
 SSERの災害支援活動では、関東からの不足品の搬送でお手伝いさせていただきました。現地に赴いたときは、震災から2週間ほど経過していましたが、活動の中心であった石巻、女川の方々からは、震災の恐怖や悲しみを振り払い、前を向いて立ち上がる強さを感じました。



**横内 義博** (42) 愛媛県 自動車整備業  
 「東北には違った形でなにか、お手伝いしたいです。」  
 今回、被災地などへの、ボランティア活動は初めて参加しました。日本で起こっていることであながら、同じ日本での出来事でないごとく感じていました。実際に現地に行って状況を前にして「ありえない」と思いながら、目の前の光景に現実味を感じないでいました。私は、地震発

後1ヶ月位してから現地に行きましたが、1ヶ月たっても助けの手が届いてない人たちがいると聞いて、被害の広さ、酷さを感じました。色々な地方から来てるたくさんボランティアの人達、いろんな分野、自分の両親よりも年齢が上のようないい人達もいて、被災者の人達の為に「なにかしたい！」と言う思いが感じられて感動しました。短い期間しかお手伝いすることが出来ませんでしたので、今後に活かすことのできる経験が出来たかはわかりませんが、この経験を生かすことがないことを祈ります。また、東北には違った形でなにか、お手伝いしたいですし、いちばんいけないと思ってることは無関心になることだと思いますので、東北のことを忘れないでいきましょう。それと近県の影響を受けている方たちのこと。石巻商業高校での炊き出しをされ方々お疲れさまでした。



**嶋本 豊** (47) 山梨県 団体職員  
 「“ありがとう”と言ってくれていたのが忘れない。」

石巻・女川に到着して思ったのは、内陸側被害に比較し海側の津波被害はまさに激甚。SSERの活動もやれることは限られている。その中でできることはきっちりやれたんではなかろうか。ケータリングで配膳をしていた時、はじめの頃は言葉少なな被災の方が、最後のほうでは「ありがとう」と言ってくれていたのが忘れない、「山崎春のパン祭り」も忘れない…。



**自律的で持続可能な緊急支援の出来る装備と人員が、NPOSSERの活動を支えた。女川原発へ地上から温かい食事と支援物資を搬入できたのも、その機動力だった。**

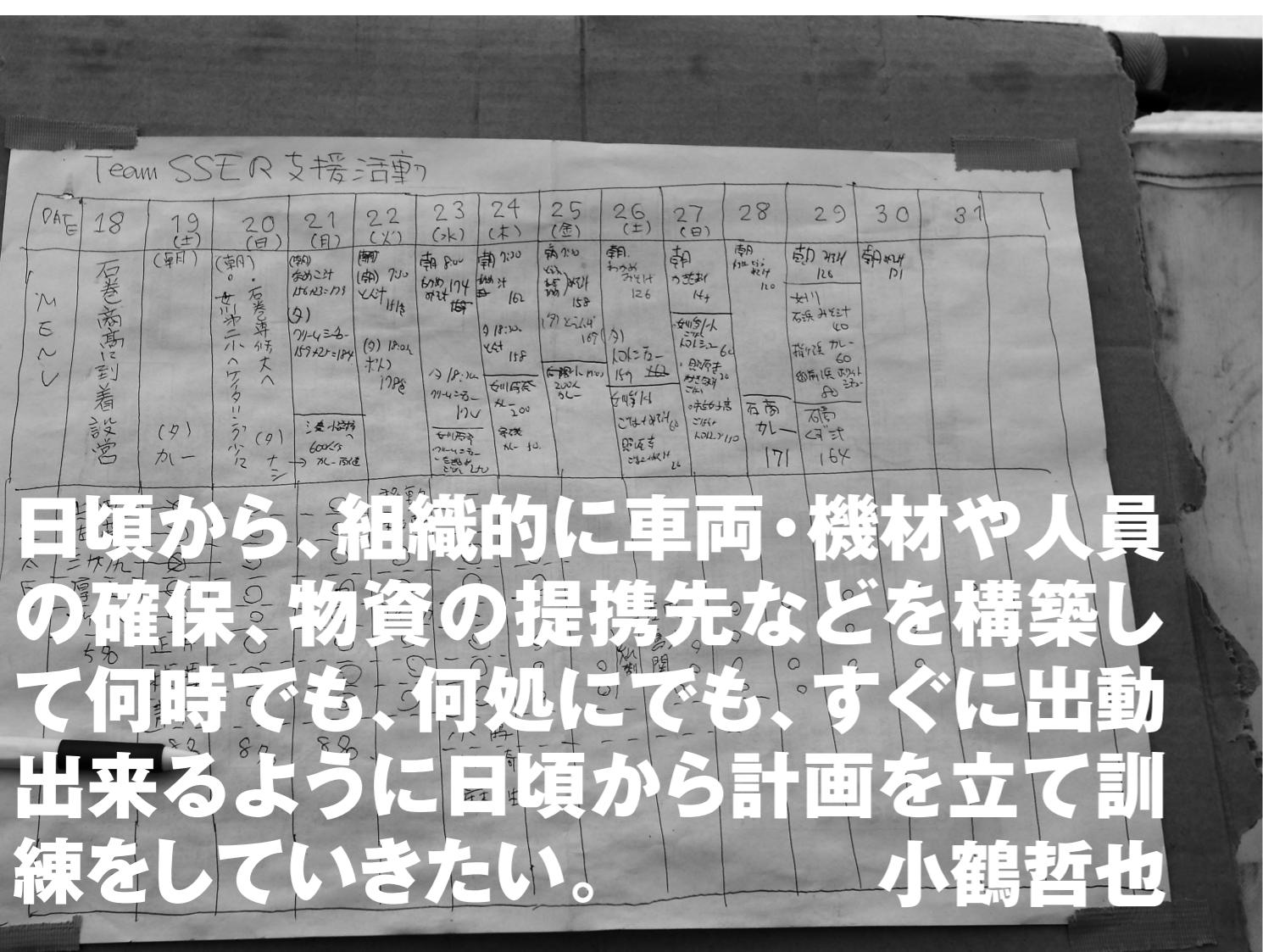


小鶴 哲也(52)福岡県 会社役員  
「忘れた頃に来る、大震災。  
“備えよ常に”」

東日本大震災から七ヶ月が経ちました。あの光景は、一生忘れることは出来ないでしょう。まだまだ、復興は、始まったばかりです。NPO SSER でさえ、出動までの時間が大幅にかかりました。確かに、受け入れ先の混乱などありましたが、最大の懸念は、福島第一原発でした。初動出動は、自衛隊・消防・警察ですが、我々で出来ることも多々あります。日頃から、組織的に車両・機材や人員の確保、物資の提携先などを構築して何時でも、何処にでも、すぐに出動出来るように日頃から計画を立て訓練をしていきたいものです。忘れた頃に来る、大震災。“備えよ常に”



赤松 章(56)青森県 カメラマン  
「ただ母は“海から山が来た”と。」  
僕が訪れた時期の女川町は人の営みが途絶えカモメの鳴き声と波の音しか聞こえず、とても静かな土地でした。少しの間ご一緒にさせて頂いた女川町の女性職員の方が、3月11日『波にのまれ握っていたおばあちゃんの手が外れてしまった、その手の感覚が今でも残っている』と何度も自分で言い聞かせるように話されていたのが今でも思い出されます。その話を聞いた車の中で古い記憶が呼び起きました。僕が子供のころ母から聞いた津波の話です。母は宇和海の島の生まれなので子供のころ南海地震の津波に襲われたはずですが、被害の詳細は話しませんでしたが、ただ母は『海から山が来た』と。早朝で暗い中襲ってきた津波は、幼かつた母には山に見えたのかもしれません。このリアルな二人の言葉は時期が来れば子供に話そうと思っています。写真も少し撮りましたが人の想像をはるかに超えた現実で、写真や映像の力の限界をはるかに超え、マスマディアは『語り部』にはなれない感じあから半年が過ぎましたが、いまだに最低限の整理しか出来ていないし、この先も多分出来ないと思っています。



日頃から、組織的に車両・機材や人員の確保、物資の提携先などを構築して何時でも、何処にでも、すぐに出動出来るように日頃から計画を立て訓練をしていきたい。  
小鶴哲也

## 東日本大震災緊急支援活動／詳細報告

## 3/12 出動準備

大震災発生翌朝、出動を決定。緊急車両登録準備、物資の調達参加人員の決定などを急ぐ。

## 3/15 出動準備完了

混乱を避けるために派遣先の決定と行動計画の策定。

## 3/17 第1陣出動

緊急支援車両HINO レンジャーFT4X4、トヨタL/Cにて6名の先遣隊出動。ガソリン、軽油、灯油、LPガス、大型テント4、厨房機器、食糧食材など約4トンの機材を輸送。

## 3/18 宮城県仙台市到着

宮城県庁を訪問、石巻市災害対策本部への展開依頼を受け石巻市災害対策本部。宮城県石巻商業高校にSSER緊急支援本部を設営。追加メンバーの派遣要請。食材などの追加搬入要請。

## 3/19 約500食提供

石巻商業高校にて朝食より炊き出し開始。石巻商業高校では配給のパン、おにぎりしか食べられておらず「温かい物は初めて」とのこと。石巻商業高校に避難されている方は、女川町の島(出島)の方が多い。以後、朝夕は石巻商業高校避難所へのケータリングを継続実施。

## 3/20 約500食提供 女川町の状況を調査。

## 3/21 約1300食提供

(福)女川町社会福祉協議会と共同で、女川町沿岸部の集落を調査。沿岸部はコミュニティの結束が強く自活していく活気がある。女川原発内に避難所が開設され約250名が避難しているが、発電所内は火が一切使えず温かい物が食べられないため、3/23にケータリングを実施することとした。(福)石巻市社会福祉協議会より今晩の食事が全く無い石巻市内の避難所(湊小学校)に食事提供の依頼があり、800人分の食事をケータリング。

## 3/22 約500食提供

石巻市内を調査。石巻市災害支援連絡会議に参加。以後、毎日出席し、他団体との炊き出しの調整を実施。

## 3/23 約750食提供 女川原発内避難所に昼食をケータリング。

## 3/24 約750食提供

昨日に続き、女川原発内避難所に昼食をケータリング。石巻商業高校で行われた女川第四小学校卒業式にNPO SSERが招待され2名が参列。株式会社ナカタアートより支援物資の水素還元水が届き、各避難所に配布開始。

## 3/25 約600食提供

(福)石巻市社会福祉協議会を通じ、自衛隊の支援物資集積地より物資引き取りが可能となる。(福)石巻市社会福祉協議会の要請により石巻市内の避難所4ヶ所を調査。過去に全く炊き出しが無く、温かい物が食べられていない向陽小学校(200名)に夕食をケータリング。

## 3/26 約400食提供

女川町の女川第一小学校、照源寺へ夕食をケータリング。寄磯小学校、前網地区へ物資輸送。宮城水産高校の状況調査。

## 3/27 約400食提供 女川地区3ヶ所へ夕食をケータリング。

## 3/28 約340食提供

石巻市内避難所3か所を調査。物資が不足していたため物資搬送。

## 3/29 約400食提供

女川町石浜地区、御前浜地区、指ヶ浜地区に夕食をケータリング。同時に物資配布。

## 3/30 約500食提供

石巻市中里地区の街角にて炊き出し。同地区は通電しているが、水道、ガスが復旧していない。1階部分が浸水して家電製品が壊れてしまつたため、温かい食事を食べていない人が多い。

## 3/31 約500食提供

女川町高白浜の海泉閣に夕食をケータリング。同時に日用品などを配布。

## 4/1 約420食提供

石巻市向陽小学校に夕食をケータリング(2回目)。向陽小学校へは我々以外の炊き出しが行われていないため、週一回ペースでケータリングを行ふ事にした。

## 4/2 約450食提供

女川町勤労青少年センター及び周辺住民へ夕食をケータリング。  
「石巻災害支援調整会議」が「石巻災害復興支援会議」に名称変更。

## 4/3 約480食提供

女川町、東北電力堀切寮集会所にて自宅避難者へ夕食をケータリング。電気、水道は復旧しておらず、震災後、初めて暖かい物を食べられた方も多かった。物資の配給を同時に実施。石巻商業高校では、自主運営を考慮し、避難者の方にも手伝って頂くように順次移行。

## 4/4 約500食提供

女川町浦宿二区集会所にてケータリング。同時に物資配布。

## 4/5 約450食提供

女川原発避難所にて昼食をケータリング。非常に好評で再度要望された。

## 4/6 約350食提供

女川町さくら集会所にて配給に合わせケータリング。被害が無い地区的為、親戚を頼って被災地域からの避難所外避難者が多い。女川町老人福祉避難所にてケータリング。ここも、今まで一度も温かい食事を食べられていなかった。避難所から要望のある女性用下着をニーズに合わせ物資集積地から選び出し(福)女川町社会福祉協議会に配送。石巻の青果市場再開に合わせ、少しでも地元経済へ貢献すべく中卸業者より野菜購入を検討。但し、買いすぎにより近隣の方の迷惑にならないよう注意。(支援物資が減り物資集積所の野菜類が減少してきた事もある。)ライフラインが復旧している地区では配給が停止しつつある。被害が少ないこれらの地域には居住人数も多い。このため、物資不足から炊き出しの需要が高まっている。

## 4/7 約350食提供

女川町西二区にて配給に合わせケータリング。西二区は壊滅。西二区は無事だが水道、電気が復旧せず、今まで一度も温かい食事を食べられていなかった。統いて女川町老人福祉避難所へケータリング。我々の撤収後、女川地区の炊き出しをどのように引き継ぐか、石巻災害復興支援会議の炊き出し分科会にて議題にあがり、調整を行うこととなった。余震発生。★23時32分頃、最大余震発生。石巻市で震度5弱。津波警報が発令されたため、我々も校舎へ避難。自宅より学校に避難してくる方にも数名おられた。道路は山手に避難する車が列をなしていた。一帯は停電し、ヘリコプターが飛び回り、救急車が走り回る騒然とした状態となった。一時間程で津波警報は解除され、翌朝9時頃には石巻商業高校周辺の停電は復旧。強い揺れが震災当日の記憶を呼び戻し、被災者の方々の心理的ストレスは相当なものを感じた。電気、水道、ガスなど復旧してきていたライフラインが破壊された事も大きな心理的ダメージとなった。

## 4/8 約270食提供

石巻市向陽小学校にてケータリング。避難所の先生方に手助けを頂いた。我々以外は炊き出しに行ってない為、他団体に継続して行ってもらうよう調整を依頼。石巻商業高校では、自立支援の為、避難所の方々と共同で調理を実施。余震の影響でボランティアセンターでは、本日の活動は基本中止。個人ボランティアの受付や単発の炊き出しについても中止。我々のように継続して活動する団体が避難所で配食する分には問題ない事を支援会議と確認し活動した。

## 4/9 約310食提供

女川原発内避難所にケータリング。行く度に笑顔が増えている。

## 4/10 約300食提供

女川原発内避難所にケータリング。女川町清水三区にて物品配布とケータリング。清水三区は海岸からかなり奥のエリアで、被災時に避難していない方が多かった。瓦礫撤去が手付かずの状態で、水産業の冷凍倉庫から溢れ出した魚が腐敗しガスや熱が出ており、一帯は異臭に包まれていた。電気、水道は不通。このエリアも我々が初めての炊き出しの事。支援会議でNPO SSERの支援活動終了が発表され、これまでの活動に対し謝辞を受けた。

## 4/11 撤収。

女川町の炊き出しの引継ぎ調整のため、他NPOと石巻災害復興支援会議のメンバーと(福)女川町社会福祉協議会にて打ち合わせ。無事引き継ぐことができた。



6/26

●ヒアリング①  
石巻復興支援協議会にて(伊藤会長、小林氏)

- ◆炊き出しはGWがピークで1.5万食～2万食。現在は、3000食程度。
- ◆仮設住宅への入居は沿岸部の集落を除き、完全な抽選で入居が行われおり、仮設住宅内にいかにコミュニティを再構築するかが大きな課題。コミュニティ作りにおいては地元住民でもない第三者の果たせる役割が大きいが、そのためにはそのコミュニティへの継続的なコミットが必要な為、その部分をボランティアで担うのは非常に難しい(本当は行政からの委託者がよいと思う)。
- ◆継続的な支援活動(事業展開)が求められている。

●ヒアリング②  
湊中学校避難所にて(四万十塾代表 木村氏)

- ◆状況は変化している。現在は被災者の自立支援の時期。炊き出しは地元の方々がやる比重を増している。
- ◆非常に先を考えて行動されている印象を受けた。よく組織された団体で継続的な支援を行なっている。

## ヒアリング③

## (福)女川町社会福祉協議会にて(武石氏)

- ◆仮設住宅への入居が始まり、避難所は統廃合が進み避難所数、避難者数が減少。現在の避難者数1156人。
- ◆衣食住は完全では無いが満たされつつある。
- ◆ボランティアの数はもうそんなに必要はない模様。自立心が強い影響もある。
- ◆漁村部は集落毎に仮設住宅が建設されているが、市街地は抽選のため仮設住宅にバラバラに入居となるため、コミュニティの再構築が必要となる。そのきっかけ作りにボランティアに協力してほしい。これには継続した活動が必要。
- ◆石巻同様、女川でも課題となっている仮設住宅におけるコミュニティ作りには様々なきっかけがあるだろうが、外部の協力と共に仮設住宅内でキーマンとなる地元の人々いるかどうかが一番重要な問題と思う。
- ◆仮設住宅の立地が悪く買い出しが困難。コンテナでの仮設店舗や移動スーパーが始まる予定。

## ■総合体育館避難所でマッサージのボランティア活動を行った白砂氏の感想

「マッサージの際に皆さんとお話しし、体より心の疲れが大きいと感じた。自身の将来(遠い将来も近い将来も)の不安が大きいようです。」

6/27

## ■女川町で5ヶ所の仮設住宅を調査

- 仮設住宅毎に建家が違う格差がある。また、避難所や一般住宅に隣接した所もあり、住民感情が心配である。商店などは近くに無いため、買い出しなどの対策は必要。集落ごと転居できるところは問題なくコミュニティを形成できると思うが、市街地住民の方が移られる仮設住宅では抽選による入居のため様々な問題が発生すると思われる。どの仮設住宅にも集会所や談話室が設置されているが、それを活用した新しいコミュニティ作りをどこが担うのか女川町においてはまだ見えていない。特に200戸を超えるような大型仮設住宅では管理組織の構築に専門家のサポートが必要なように感じられた。石巻に比べて閉鎖的な所のある女川町においては、外部のスキルを持った人々の力を借りるための合意形成から取り組む必要があり、その実現には困難が予想される。

## ■仮設住宅入居者へのFAX設置援助

- 表向きには非常に前向きに生活再建に取り組まれていたご夫婦だった。ただ、今後町の復興がどのように進んでいくかということについては、大きな不安を抱いているようだった。女川町の他の方にも言えることだが、何とか自分たち(と町)の力で復興しようという意識が強い。このような方々に対しては行政が早く復興ビジョンを示していく必要があろうが、この部分については民間のボランティア組織にできることは少ない。

## ■石巻復興支援協議会分科会に参加

- ◆石巻の自衛隊の炊き出しが終了。避難所で自炊できるようにしていく。炊き出しは、自立の妨げになる。
- ◆ハエが大発生している。ハエ取りのノウハウも共有され駆除を進めているが、追い付かない状態。

6/28

●ヒアリング⑤  
石巻商業高校にて(上総教頭、小山先生、他3名の先生)

- ◆石商に校舎の全壊した石巻女子高校3年生を受け入れるため、5月15日に避難されている方全員が他の避難所に移った。市が急に決めたため、非常に戸惑ったとの事。
- ◆内定取り消しとなった昨年度の卒業生は県と情報をやり取り受け入れ先を探しているが宮城県内には雇用が無い。県外(特に遠方)の雇用は相当あるが、県内から出たがらない。被災した、家族、地域を残して遠方に行くに抵抗があるのかもしれない。
- ◆現3年生に対しては、現実問題として県内に求人が無いことを理解させ、県外に出て地元を助けるなり、数年後に帰ってきて復興を進めるなど、指導している為か県外希望の比率が高くなっているとの事。沿岸部企業が壊滅的な状況なので早期に県内の雇用の創出が望まれる。

- ◆生徒たちは被災しているにも関わらず、皆元気に登校している。それが学校としては一番の救い。

- ◆校舎のすぐ近くが瓦礫置き場となっている。瓦礫置き場だが今後どこに移動させるのかが決まっていない。非常に高く積み上げられており異臭もある。しかし最大の問題は、メディアが必要以上に騒ぎ立てている事。取材はひっきりなしに来るとの事。被災直後の食料の報道でメディアの怖さを教わっている為、今後の報道を恐れている。

- ◆皆様から初期の炊き出しについて、非常に感謝されました。

- ◆被災地支援活動とは関係ないが、瓦礫置き場の問題はこのエリアだけでなく多くの場所で問題になってくると思われる。高校や仮設住宅の側、という「おいしい絵がらみ」のみが先行し、そこに通う学生や暮らす人々の気持ちはおざなりにされがちである。

## ●ヒアリング⑥

## (福)女川町社会福祉協議会にて(阿部会長)

- ◆大変な時期に炊き出しをしたことに対し謝辞を頂いた。又、撤収時、引き継ぎしたことについてもお礼を頂いた。
- ◆女川原発内の避難所は避難者数が減少ていき、最終的に自主的に集会所に移動し閉鎖となった。
- ◆女川町は女川町にあった方法で災害ボランティアの受け入れをされている。地域コミュニティのつながりの強い地域では石巻とは別の方法が必要なのであろう。社会福祉協議会は別にしても、町や住民としてはボランティアが深く地域に入り込むことを望んでいないよう感じた。

## ■仮設住宅に支援物資配布

- 危惧されていたように、隣がどのような方かわからない世帯が多く、コミュニティの形成は必要不可欠であると感じた。同じ女川町内でも地域により状況は全く異なる。街中から離れるほど外部の人々への警戒心はつよいものの、地域内の繋がりが強い。これが石巻市になるとともに差があると思われ、一口に仮設住宅のコミュニティ形成と言っても、地域によってその対処法をひとつひとつ変えていく必要がある。(地域コミュニティとは元来そういうものであると思うが)

## 東日本大震災緊急支援活動

2011年3月17日～4月13日

3月18日～4月11日  
現地滞在25日間

- 3月17日 出発
- 3月18日 宮城県仙台市へ物資輸送。宮城県庁より石巻市への支援要請。石巻市災害対策本部より、石巻商業高校内避難所での炊き出し要請。石巻商業高校に炊き出しテント設営。
- 3月19日 石巻商業高校にて炊き出し開始。女川地区での調査開始。以降、石巻市内・女川町で石巻市社会福祉協議会・石巻災害復興支援協議会、女川町社会福祉協議会、愛媛県社会福祉協議会と協議・調整し、炊き出し、ニーズ調査、物資輸送を実施。炊き出しは、合計約3万食を提供。
- 4月11日 撤収
- 4月13日 帰着

## 活動報告及び意見交換会

2011年4月2日 於:琵琶湖リゾートクラブ会議室



「東北関東大震災の支援活動に関する中間報告と、今後の活動方針」  
同時開催チャリティーオークションの売上げ173,200円全額を義援金に算入、支援部隊の食材や資材費に充当。

## 支援活動後の現地調査

2011年6月25日～6月29日

目的：緊急支援活動の成果の確認および今後の支援活動についての情報収集ヒアリング

人員：白川淳事務局長、厚生和雅理事、白砂久司(ボランティア)

対象：女川ボランティアセンター(女川社会福祉協議会)、石巻社会福祉協議会、石巻災害復興支援協議会、石巻商業高校、四万十塾、仮設住宅の方々からヒアリング。各避難所にてマッサージ施術。

